



こんなんでもいいんすか。

bokuno-oujisama-!!

ボクの王子様・II

原作:ねぎしお まんが:きんぎん

—夜—

ふう、
さっぱりした…

じょいよ〜

今日は
何があるんだっけ

ああ、
これもう
最終回かあ…
面白かったなあ

始まるまで
ちよつと
モ●ハンしよつと

あ
そうだ。幸子と
どこに行くか
考えとかないと…

あんまり遠くは
行きたくないし…

近くで買物
出来そうなのこつて
言ったら駅前かなあ

ちようど
お昼ぐらいいに
合流する事に
なりそうだし、
どっかで何か
食べるかなあ…

まあそれは
その時の気分で
決めればいいか…



…って、なんで私が
デートプランみたいなのを考え
なくちやいけないんだー！



幸子は杏に
何を求めてる
んだろう…？



分からない…

まあ、
いいや…
モン●ンしよ…





あ、幸子いた
ういー

待ちましたよ、
杏さん

女の子を
待たせてはいけません！



いや、杏も
女の子
なんだけど…

細かいことを
気にしては
いけません。

さあ、
いきましよう！



(理不尽過ぎや
しないかね…)

んで、
どうするー？
先になんか食べる？



そうですね！
ちようどお昼時ですし、
少しお腹が空いています

じゃ、
なんか食べるかー
食べたいものある？



杏さんに
お任せしますー！

幸子に
かけるって
いわれた



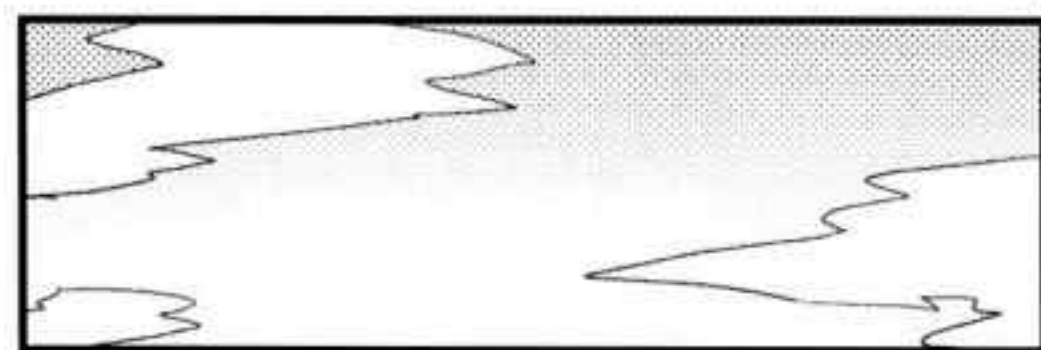
まあ、いや

じゃあ
適当に決めよ...



どこに連れて
行ってくれるのか
楽しみです！

期待しなくて
いいよー



ここがいいかな

フー
やれ

ちよつと

やれ



ん？

何ですか、
ここは

●松屋
つや



おかしい
ですよね!?

何が？

女の子を
食事に誘う
お店！

美味しいよ？

ピル

ポル

そうかもですけど！
そうかもですけど！



もう！
今日はボクを
お姫様扱いして下さいー！

はいはい

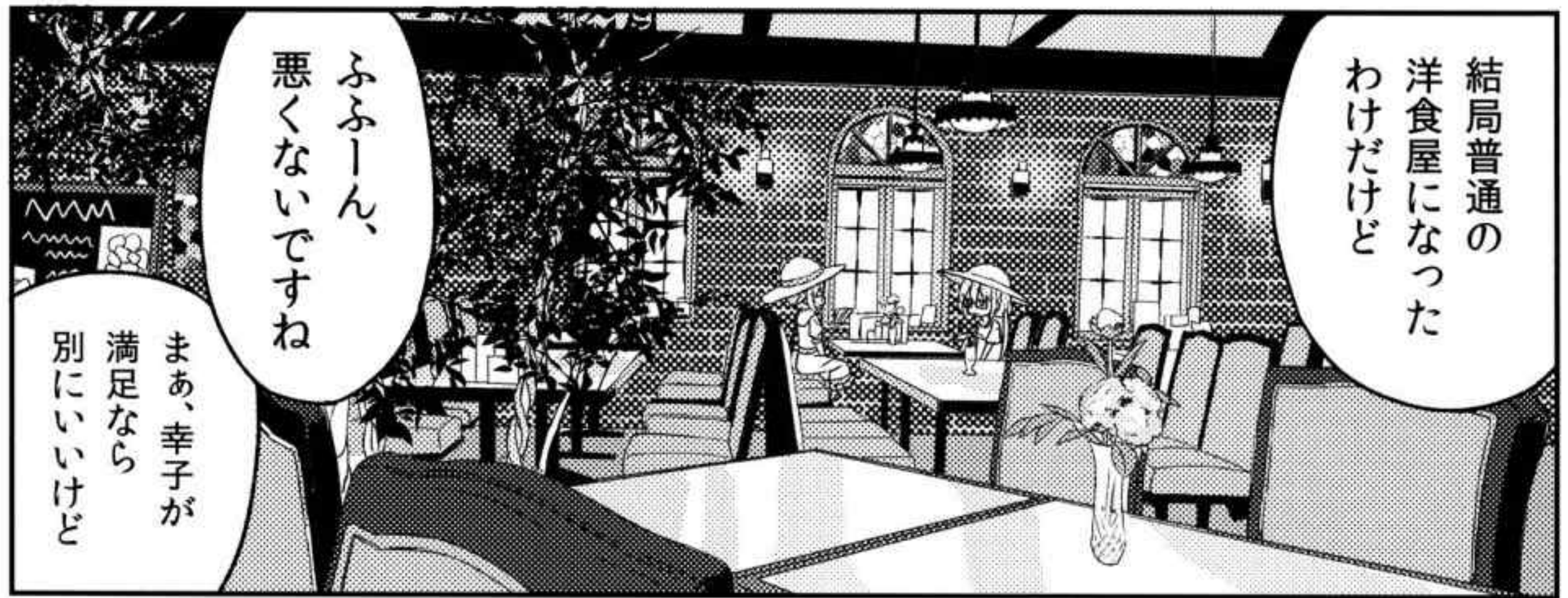
幸子が何も
言わなかったら
ここにするつもり
だったけど

で



冗談だよ

やっぱり幸子を
弄るのは面白いなあ



結局普通の洋食屋になったわけだけど

ふふーん、悪くないですね

まあ、幸子が満足なら別にいいけど



ハンバーグも美味しいですよ



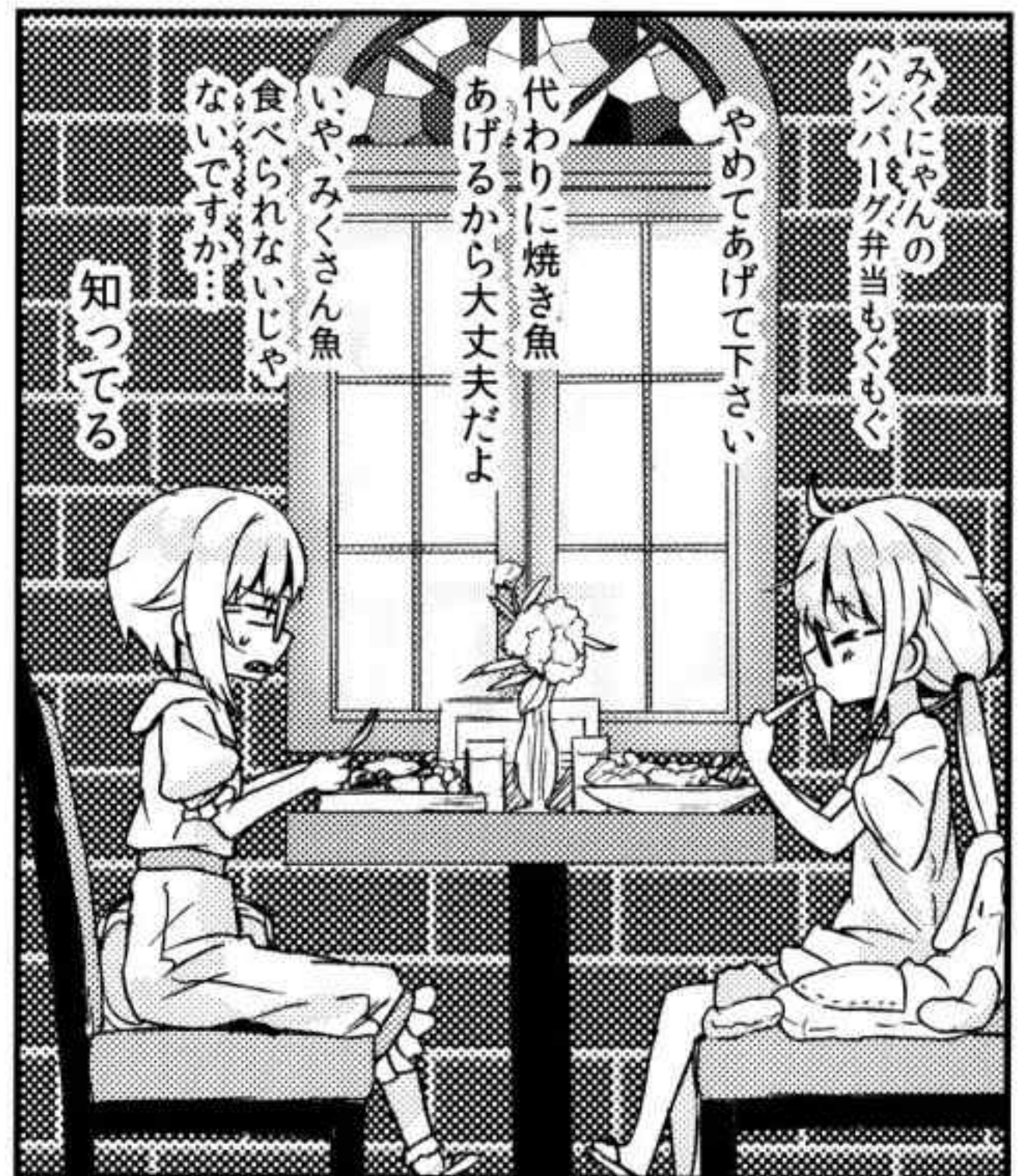
もぐもぐ…エビフライうまい



にぽっ

杏さん、本当にボクとみくさんと菜々さん弄るのが好きですよ…

だって面白いんだもん



みくにやんのハンバーグ、弁当もぐもぐ

やめてあげて下さい

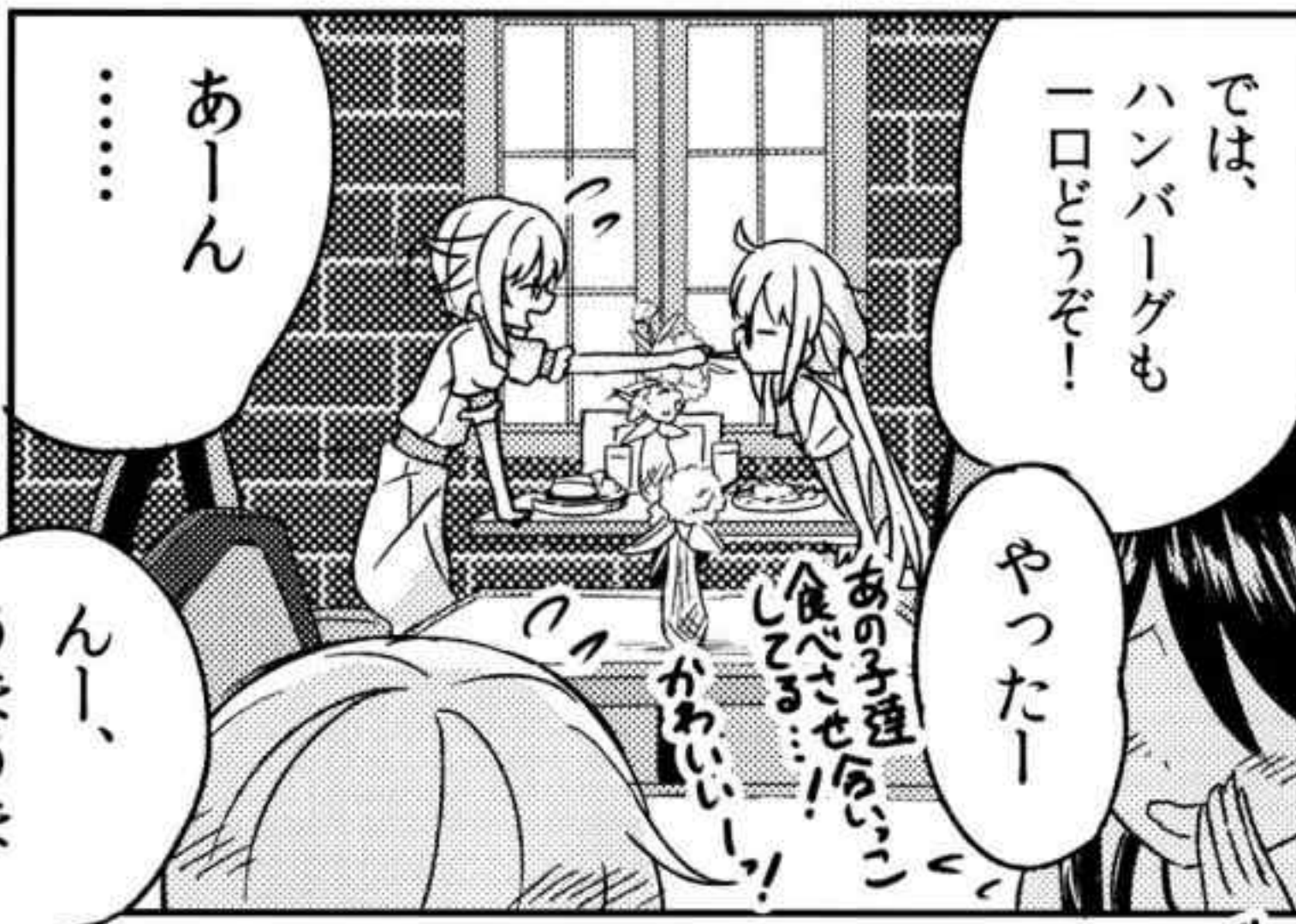
代わりに焼き魚あげるから大丈夫だよ

いや、みくさん魚食べられないじゃないですか…

知ってる



ボクは面白くないですっ ナンテそんないい笑顔なんですか



お腹いっぱい
だから3時間ぐらい
休憩していい?



そんなに休んだら
服を選ぶ時間が
なくなりますよ!



買う時間さえあれば
いいんじゃないの?

見る時間や選ぶ時間も
必要ですよ。それも
楽しみの一つなんですから!



ふーん...
そんなもんなの?

ほら、ゲームでも、
装備を色々じっくり
見たりしますよね!



おー、
そう言われると
説得力がある

ふふーん、
そうでしょう!

でも、現実の服は別に
スキルとか防御力とか
気にする必要ないし...

- ニートのあめ[甘さ+10]
- ニートのTシャツ[気力-100]
- ニートのスパッツ[気力-100]
- ニートのうさぎ[だるさ+5000]



いや、
その理屈はおかしい
と思います

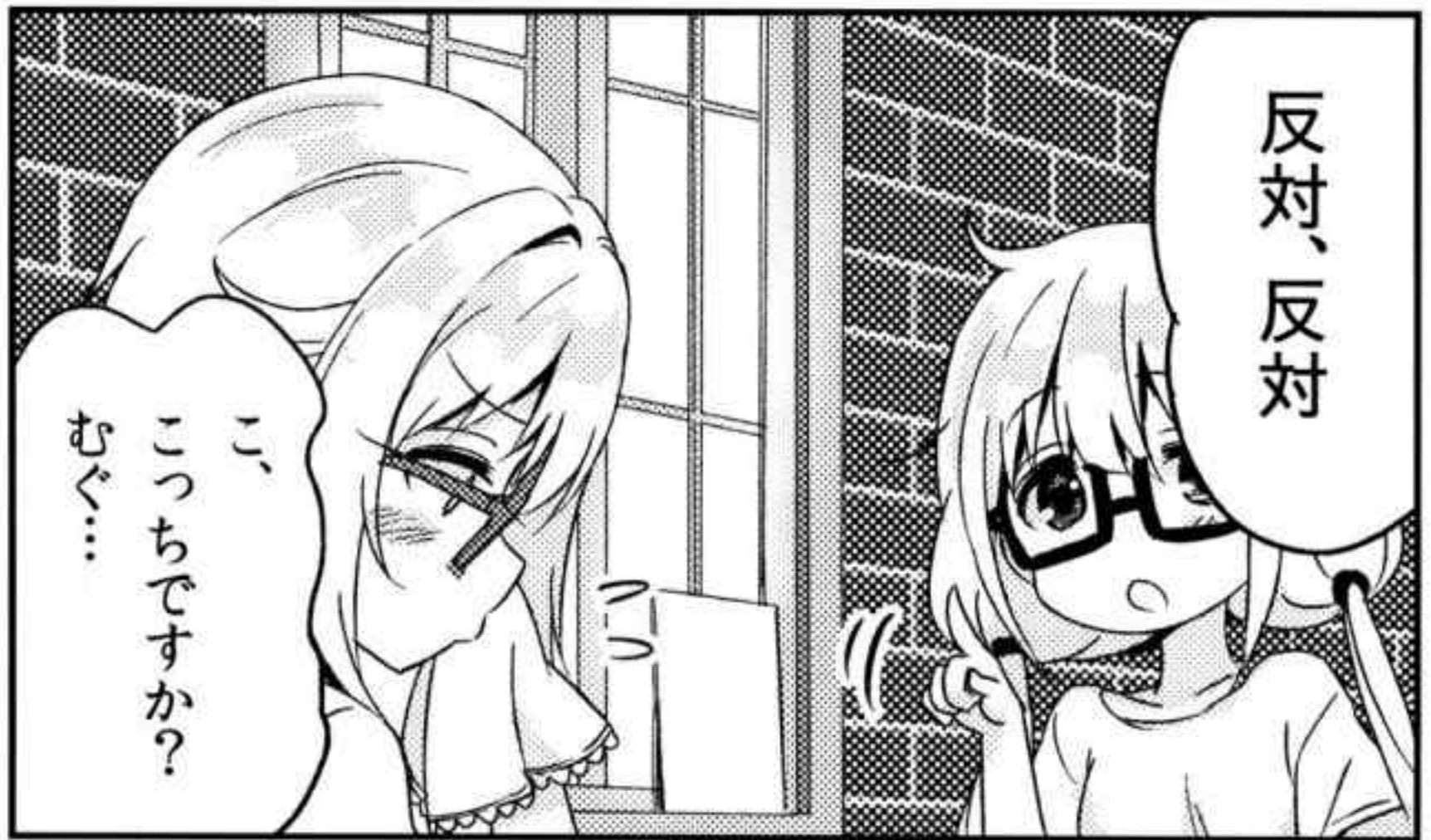
えー...

って、幸子



口に
ソース付いてる

えっ、
どこですか?
ボウとしましたが



さて、そろそろ
行きましようか！



おぶってー…

何でですか！

ナツキ、あんなに…!!

ほら、いきますよ

しょうがないなあ…

(もう、ホントは
ボクが杏さんに
手を引いて欲しいのに…)

どしたの？

何でも
ありませんよ

左手で
いーよ

ほら、
いきますよー！

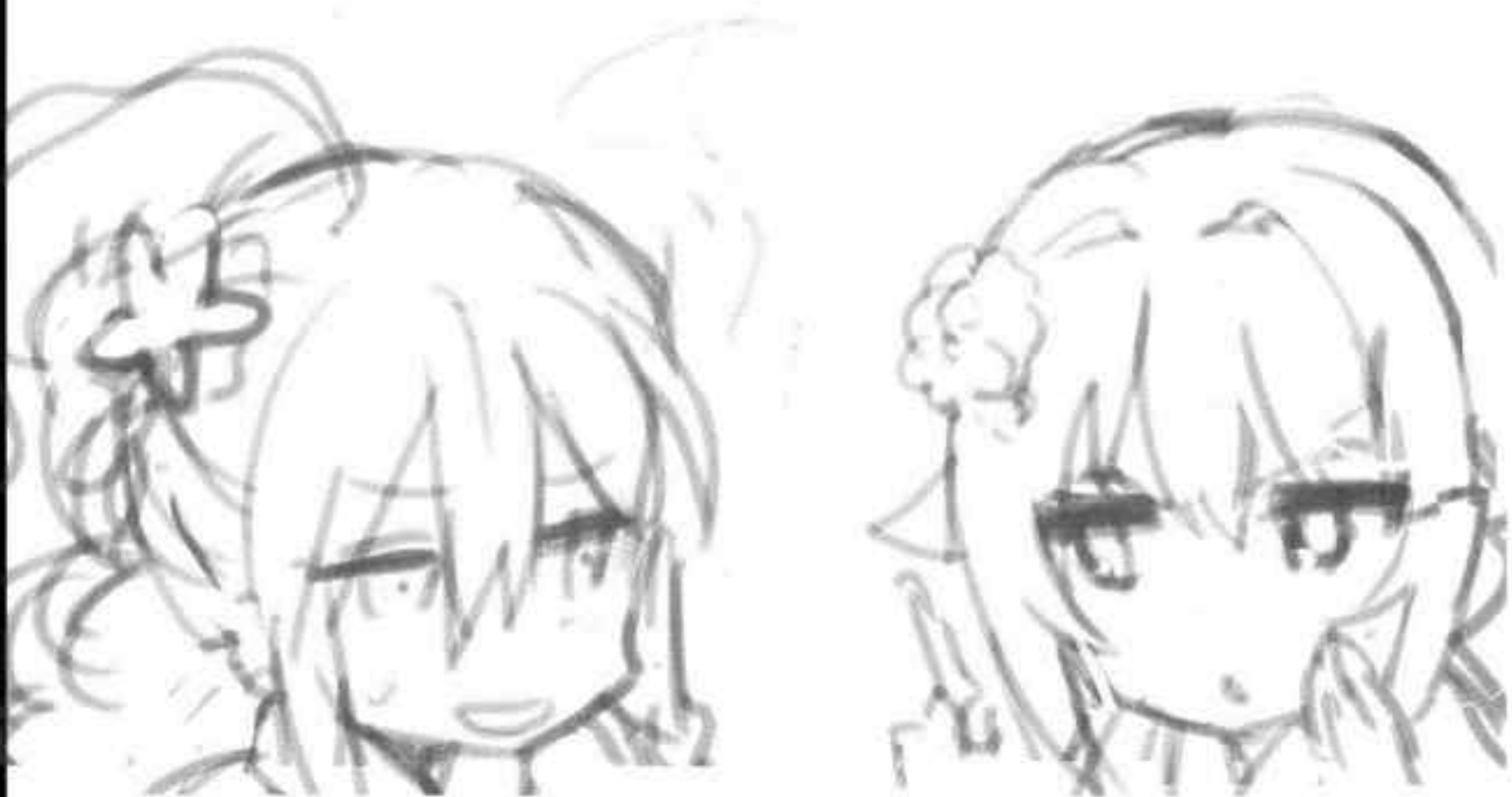
ふあー…

つづく

◇表紙ラブ



◇サークルカット



ボクの王子様II・購入者特典SS

杏「夏の終わりに」 作・ねぎしお

幸子「夏祭りに行きましよう！」

輝子「フヒ」

小梅「わあ……」

杏「また唐突だねえ……」

幸子「もうそろそろ夏も終わってしまいました

し、最後に思い出作りしませ

か？」

小梅「良いと……思う……」

輝子「夏祭りか……わ、悪くない……」

杏「暑くて面倒な夏が終わってくれるなら

それで十分なんだけど……」

幸子「来週の日曜日に、近くであるみたい

なのでそれに行きましよう。皆さん、

予定とかは大丈夫ですか？」

小梅「私は……うん、大丈夫……」

輝子「私も問題なさそう……」

幸子「杏さんはどうですか？」

杏「えっ……あ……え……うーん」

小梅「何か……予定があるの……？」

杏「いや、そういうわけじゃ……」

幸子「あっ……まさか杏さん、また外に出る

のが面倒だと思ってますね!？」

杏「ぎくつ」

幸子「やっぱり!もう、カワイイボクの浴衣

姿を見たくないんですか!？」

杏「いや……別に……」

幸子「……ぐすつ」

杏「ハッ……またやってしまった」

小梅「い、いつものが始まった……」

輝子「フヒ……お馴染みのやりとり……」

幸子「ボクの……浴衣姿……カワイイの……」

グスン」

杏「ああ……冗談だから……!幸子の浴衣姿

見たいから!」

幸子「ふ……ふふーん!ですよねー!」

こんなカワイイボクの浴衣姿を見たく

ないなんて人がこの世に存在するはず

ありません!」

杏「そこまで……!？」

幸子「では、杏さんも参加ということでは

ですねっ!」

杏「う……しょうがないなあ……」

小梅「えへへ……楽しみだね……」

輝子「なんか……リア充っぽい……フヒ」

杏「暑くないと良いなあ……無理かなあ」

幸子「あ、ちなみに全員浴衣着用でお願い

しますね!」

杏「ええー!？」

小梅「うん……分かった……」

輝子「ゆ、浴衣か……ウチに……あつたかな……」

幸子「無ければ買いに行きましよう!ボクと

小梅さんが輝子さんにピッタリなのを

選んであげますよ!」

小梅「可愛い……選ぶね……」

輝子「かわ……キ、キノコ柄とかが……いいな……」

フヒ」

幸子「キノコ柄の浴衣ですか……み、見つかる

と良いですけど……」

杏「ま、まあ3人で可愛い浴衣見つけて

おいで……」

幸子「ふふーん!勿論杏さんも一緒に

よっ」

杏「ぐつ……ほ、ほら、杏はきらりに用意して

もらうから……」

幸子「みんなで浴衣を選ぶところから夏祭り

は始まっているんですよ!一緒に輝子さ

んの浴衣を選びましよう!」

輝子「ヨ……ヨロシク……」

杏「うー……分かったよ……」

小梅「えへへ……良かったね……」

輝子「フヒ……」

幸子「楽しみですねえ!」

杏「やれやれ……」

――夏祭り当日――

杏「うーわ……凄い人の数……」

輝子「これはヤバイ……」

小梅「はぐれないように……気をつけない

と……」

幸子「さあさあ、待ちに待った夏祭りです

よー!」

杏「あづい……」

小梅「だ……大丈夫……?」

杏「おあ……」

輝子「うちわ……使う……?」

杏「おあ……」

輝子「うちわ……使う……?」

杏「使う…はふー…」

幸子「皆さん、浴衣似合ってますねえ。ポクが一番カワイイのは揺るぎません

けどー！」

杏「せやな」

小梅「えへへ…ありがとう…」

輝子「フヒヒ…良いのが見つかって…

良かった」

杏「まさか本当にキノコ柄の浴衣が見つかる

とは…」

小梅「輝子さんに…ピッタリ…」

幸子「よく似合ってますよ！」

輝子「フフ…ありがとう…」

杏「とりあえず屋台でも見てまわるー？」

幸子「そうですね。買いたい物があれば各自

で買っていく感じにしましょう」

輝子「オッケー…」

杏「今からこの人の群れに飛び込まないと

いけないのか…」

小梅「こ、これが…全部…ゾンビ…だったら

なあ…」

幸子「こ、怖い事言わないで下さい！」

小梅「えへへ…」

杏「屋台で焼きそば焼いてるゾンビ」

輝子「フヒヒ…シユール…」

小梅「色んな屋台があるね…！」

幸子「目移りしちゃいますねえ」

輝子「あのくじ引き…特賞…PS4だって

さ…凄いな…」

杏「絶対当たらないって…」

小梅「や、やっぱり…そうなのかな…？」

杏「当たりが入ってるかもどうかも怪しい

よね」

幸子「そ、それって詐欺」

杏「おっと、それ以上はいけねえ」

幸子「むぐぐ…」

輝子「フヒヒ…お祭りの闇だな…」

小梅「じゃ、じゃあ…射的…とか…

どうかな…」

幸子「いいですねえ。ポク、あのぬいぐるみ

が欲しいです！」

小梅「わ、私は…あの…ドクロ…」

杏「ふむ…じゃあ、ちよつとやって見るか」

輝子「じゃ、じゃあ…小梅のは…私が…」

小梅「わあ…頑張ってる…」

幸子「期待してますよ！」

杏「いや、期待は…まあ、いや。

よ…つと、どう構えたらいいのかな…」

輝子「こ、こう…？」

幸子「ふふ、輝子さん、スナイパーみたい

ですねえ」

輝子「フヒヒ…狙い撃つぜ…」

杏「やだカッコいい。よし、それじゃ…

とりや

小梅「あ…外れちゃった…」

杏「うーむ」

輝子「フヒヒ…次は…私…え、えい」

小梅「当たった…！」

幸子「…けど、落ちませんでしたね」

輝子「ぐぬぬ…」

杏「よし、輝子…二人で同時に同じ物を

狙おう」

輝子「フヒヒ…オッケー…」

小梅「な、なんか…カッコいい…！」

幸子「これは期待出来そうですね…！」

杏「輝子いくぞーっ」

輝子「ヒヤッハアア！」

幸子「…結局、結構かかりましたね」

杏「おかしい、こんなはずでは…」

輝子「フ、フヒヒ…」

小梅「でも…両方とも取れて良かった…。

ありがとう…輝子さん…杏さん…

幸子「ふふーん♪お礼に、お二人に何か

奢りますよ！」

杏「お、いいのー？じゃあ、杏、チョコ

バナナ食べたい」

幸子「分かりました」

小梅「輝子さんは…何がいい…？」

輝子「じゃあ…焼きそば…」

小梅「うん…分かった…」

幸子「ポクは綿飴でも食べましょうか！

ふふ、綿飴を頬張るポクカワイイ！」

杏「小梅は何食べる？」

幸子「無視は本当に心が折れるのでやめて

下さい」

杏「ははは」

小梅「ふふ…じゃ、じゃあ…私は…」

たこ焼き…食べる…」

杏「じゃあ、どつかで座って食べるか」

幸子「では、ボクと小梅さんで買って来るの

で、杏さんと輝子さんは座る場所の

確保をお願いしますね！」

杏「あいよ」

輝子「任せろ…フフ」

幸子「お待たせしました」

小梅「買って来たよ…」

輝子「おかえり…」

杏「んー、りんご飴うまー」

幸子「えつ」

小梅「りんご飴…？」

幸子「あの、杏さん、それは」

杏「りんご飴」

幸子「いえ、それは分かりますけど！

チョコバナナは！？」

杏「食べる食べる。ちよーだい」

幸子「は、はあ…そうですか？では」

杏「ありがと」

輝子「フヒヒ…両手で…りんご飴とチョコバ

ナナを…」

幸子「子供じゃないんですから…」

杏「へへへー、いいのいいのー。あむ…

んー、チョコバナナもうまー」

幸子「まあ、いいですけどね…では、ボク達

も座って食べますか」

小梅「うん…。輝子さん、焼きそば

どうぞ…」

輝子「フヒ…ありがとー…」

幸子「いただきます…はむ…ふふ、甘くて

美味しいですねえ」

杏「一口ちよーだい」

幸子「えつ…りんご飴とチョコバナナを食べ

て、綿飴まで…？」

杏「一口だけ一口だけ」

幸子「もう、しようがないですねえ…一口だ

けですよ」

杏「あー……がぶり」

幸子「フギヤー！？大口で食べました

ねー！？」

杏「んー…もぐもぐ…あまー…」

幸子「なんという事を…！あ、というか

杏さん、顔が綿飴だらけ…！」

杏「え？ホントに？」

幸子「もう、何やってるんですか…今、ハン

カチで拭きますから…」

幸子「あと、リンゴ飴かチョコバナナ、一口

貰いますからね！」

杏「はいはい」

輝子「フヒヒ…楽しそうだな…」

小梅「えへへ…じゃ、じゃあ…私達も…

少し、交換する…？」

輝子「フヒ…オツケー」

小梅「じゃ、じゃあ…ふう…ふう…

あーん…」

輝子「あ、あー……むぐ…フヒ…はふ…

おいひ…」

小梅「えへへ…よかった」

輝子「じゃあ、私も…あ、あーん…」

小梅「あーん……ん…もぐ…おいしい…」

輝子「そうか…よかった」

杏・幸子(かわいい)

幸子「さて、一息つきましたし、また屋台を

見て回りましょうか！」

小梅「うん…行こう…」

輝子「キノコの屋台を目指して…」

杏「あ、あるかなあ…」

幸子「ここで、何かボクにピッタリな屋台で

カワイイアピールを…」

杏「言ってる事がよく分からないけど…幸子

にピッタリな屋台っていうと…金魚すく

いとか？」

幸子「杏さんが何を言おうとしているかよー

く分かりますよ！」

杏「てへっ」

幸子「もう！水をかぶったりしませんから

ね！」

杏「はいはい」

幸子「金魚すくい…は、金魚を持って帰らな

いといけませんし、ヨーヨーすくい

で証明してみせます！」

杏「いや、そんな無理しなくても…」

幸子「ふふーん！任せてくださいー！さつき射
的でぬいぐるみを取ってもらいました
からね」

幸子「今度はボクが杏さんにヨーヨーを
プレゼントしましょう！」

杏「そ、そうか」

杏（別にいらないけど…まあ、いいか）

小梅「じゃ、じゃあ…私も…輝子さんに

ヨーヨー…取ってあげるね…えへへ」

輝子「フヒ…頑張つて」

幸子「さあ、カワイイボクにすくつて貰える

幸せ物のヨーヨーは誰になるでしょう
か…！」

杏（ヨーヨーが『アツハイ』とか思つて

そうだ…）

小梅「輝子さん…ど、どれがいい…？」

輝子「フヒ…じゃあ、この黄色いので…」

小梅「うん…分かった…」

幸子「……………」

輝子「ふ、二人とも…ヨーヨーは取れた

けど…」

小梅「さ、幸子さん…」

杏「ま…まあまあ、ちよつとヨーヨーが跳ね

て顔に少し水が掛かっただけじゃない

か」

杏（まさか本当にやるとは…）

幸子「ぐぬぬぬ…！」

杏「ほ、ほら、可愛い幸子にヨーヨー取つて

貰えて嬉しいから…！」

幸子「…」

杏「いやー、やっぱり、幸子がいないと
なあ」

幸子「ふ…ふふーん！そうですよね！カワイ

イボクにヨーヨーを取ってもらえるな

んで、本当に杏さんは幸せ物ですよ

ね！もつと喜んでもいいんですよ！褒

めてもいいんですよ！」

杏「お、おう…」

杏（幸子のこの性格が疲れる時と助かる時

とある…）

輝子「フヒ…♪」

小梅「えへへ…輝子さん…ヨーヨー…

楽しい…？」

輝子「わ、悪くない…ありがとう…小梅」

小梅「うん…！」

幸子「さあ、杏さん、もつとボクを褒めて」

杏「あ…あー、ほら、カキ氷が売ってるよ。

せつかく夏祭りに来たんだからカキ氷は

食べないと」

小梅「あ…そ、そうだね…食べよう…」

輝子「フヒ…色んな味があると…いいな」

幸子「む、そうですねえ。ボクはカワイイ

イチゴ味で決定ですけどね！」

杏（ほっ…）

小梅「カキ氷…美味しいね…」

杏「暑いから助かるよ…」

幸子「うー、キーンとしますね…！」

輝子「冷たい物食べると…なるよね」

杏「アイスクリーム頭痛って言うんだって
さ」

幸子「またまた、そんな冗談を…」

杏「いやいや、ホントホント」

小梅「そう…なの…？」

杏「そうだよー、正式な医学用語だよ」

輝子「知らなかった…」

幸子「まさか、本当にそんな言葉があるなん
て…」

杏「面白いよねえ」

ヒュ———！！

小梅「あつ…！」

幸子「わあ、花火ですよ！」

輝子「お、おお…！」

杏「ほ…！」

小梅「綺麗…！」

輝子「い、いいな…！」

幸子「こんな近くで見れるなんて…！」

杏「へー…！」

小梅「た…たまやー…」

幸子「かぎやーっ」

杏「おけやー」

ド—————ン！！

杏「おけやー」

幸子「かぎやーっ」

杏「おけやー」

杏「おけやー」

輝子「フヒ……ふろやー……」

幸子「最後の2つ違いますよね!？」

杏「わはは」

輝子「フヒ……つられて……」

小梅「ふふ……」

杏「……っと、花火も終わりかな？」

幸子「みたいですすねえ」

杏「そろそろ帰りますかー」

小梅「う、うん……」

輝子「そうだな……」

幸子「名残惜しいですけど、あまり遅くなってもいけませんからね」

杏「あー、疲れた……」

幸子「ふふ、でも、楽しかったでしょう？」

杏「え……ま、まあ……ね」

幸子「ふふーん♪」

小梅「えへへ……♪」

輝子「フヒ……♪」

杏「な、なにさー」

幸子「なんでもありませんよっ」

小梅「また……みんなであうね……!」

輝子「約束……」

杏「……気が向いたらね」

幸子「はいっ」

小梅「うん……」

輝子「フヒ」

おしり



ちよつこ
何考うそん
ですか





まき

御姉様〜♪
かおいい〜

やさし
ね?

まき



ブルーロックチェック
コーデ

ゴシックナイトコーデ



こんなんでもいいんすか。